

基礎技能・音楽 (第1報)

— 読譜 —

三輪 雅美^{1*}

Basic skill・Music (I) Reading Music

Masami MIWA

I はじめに

本学短期大学部に保育学科が設立され本年で4年目となる。これまで「基礎技能・(音楽1・2)」及び「表現(音楽)」の指導に携わってきた。基礎技能の中では昨年度までピアノ個人指導を、今年度はそれに加えて、クラス授業での音楽理論を担当した。

ここ1～2年保育士・幼稚園教諭採用試験における音楽課題の傾向に変化がみられる。あらかじめ出題された課題曲や、前もって受験者が選択した曲を演奏するだけでなく、初見視奏を出されることが多くなった。これまでも初見視奏を課題とする園はあったが、ここ数年目立って多くなってきた。これはあらかじめ念入りに準備された曲の演奏から、音楽的な能力を判断するだけではなく、保育現場においてその場で即座に対応することができるかどうか、音楽的な実践力を試されるものである。このような課題には、楽譜から瞬時に音楽を読み取る力、すなわち読譜力と演奏力が求められる。

そこで本年度は「基礎技能・(音楽1)」の指導目標の一つに、楽譜に対する学生の意識を高め読譜力を育成していくことをおいた。これまでも読譜に関する指導は、ピアノ個人レッスンを通し各教員がそれぞれに行ってきたが、今年度は学科全体で期間・方法を統一し指導効果をみることにした。

過去3年間のピアノ個人指導の中で、楽譜に階名を書き込み、それを見ながら演奏する学生の姿を頻繁に目にしてきた。これは特にピアノ初心者やピアノを苦手とする学生に多く見られる。この様子から、まず学生が読譜に対してどのような意識をもっているのか把握するため、平成20年度入学の本学保育学科の学生に対して「基礎技能(音楽1)」第1回目のオリエンテーション時に、読譜に関する意識調査を行った。その結果をもとにして「基礎技能・(音楽1)」の授業では、楽譜を見て音を読むという読譜の入り口の段階で、つまずきのある学生に焦点をあて、音符カードを用いた指導を試みた。本研究では、その取り組みの効果を、学生に対して行った2回のアンケート結果から考察すること、またそこから後期開講の「基礎技能(音楽2)」や今後の音楽関連科目における読譜指導の在り方を検討すること、以上の2点を目的とした。

1* 名古屋女子大学短期大学部保育学科非常勤講師

Ⅱ 基礎技能の意義

保育現場では、子どもたちが自発的にうたを歌い楽器を鳴らすなど、遊びの中で自由に音楽を取り入れたり、発表の場では保育者の指導の下、みんなで心をつにして歌ったり器楽合奏をしたりするなどさまざまな音楽活動が行われている。各園により、またクラスによっても内容・取り組みの度合いはずいぶん異なる。これは、現行の幼稚園教育要領（平成20年改訂）において、保育は環境を通して行うものとし、保育者は幼児一人一人の行動の理解と予想に基づき、環境構成を行うといった大きな枠組みでカリキュラムが捉えられているためである。そしてここでは、指導上の柔軟性、多様性が認められたものとなっている。

学生たちは、このような保育現場に適応していくために、保育者として必要な音楽的資質を身につけることが求められる。その資質は二通りあると考える。一つは子どもたちの模範となるような音楽を発信していく力、もう一つは子どもたちの表そうとしているものを読み取り、受け止めることのできる力である。

本学科で1年前期に開講の「基礎技能（音楽1）」は、これらの力をつける土台づくりと位置づけられる。この授業は1クラスを二分して「音楽理論」と「ピアノ個人指導」を45分ずつ交互に行うという形態をとっている。授業を通して学生たちは、音楽の基礎的な知識とピアノ奏法の基礎を学ぶ。これを土台として後期「基礎技能（音楽2）」における幼児の歌の弾き歌いや歌唱指導、2年前期「音楽表現」の科目へとつないでいく。基本的な技術の習得の上に表現する力を育成する指導を目指している。

Ⅲ 読譜について

1 読譜とは

音楽には自ら曲を作り、その曲や演奏を通して表現する1次的表現と、誰かが作曲したものを受取り表す2次的表現がある。作曲者が自分の表現を一定の記譜法に従って紙面に記したものが楽譜である。楽譜には拍子、音の高低、リズム、などを軸に作曲者の思いが記されている。そして2次的な音楽表現は、そこに記されたものを読むことから音楽を感じ取り演奏することと言えるだろう。この楽譜を読み取ることを読譜という。読譜を丸山は状態・レベルによって次の3段階に分けている。「①楽譜に書き表された音符や諸記号を読む、すなわち名称がわかり意味・概念を知ること、②楽譜を見て音楽として表現（視唱または視奏）すること、③楽譜を読むことによってその楽譜が表現する音楽の内的表象（internal representation）を得ること」¹⁾である。

一般に音楽を演奏することは、技能だといわれている。しかし①の楽譜に書かれていることを記号として読み取る、また②のそれをそのまま歌ったり演奏したりできる力は技術である。この技術と技能の違いについて相原は、「技術とは、知識として伝達可能な客観的なもので、その知識を得ただけで何かできるようになった能力のことであり、技能とは、いくら本を読んでも、それだけでは能力にならず、練習に練習を重ねなければ絶対に身につかない能力のこと」²⁾としている。③の内的表象を得るとは、楽譜を読んだ時に頭の中にその音楽をイメージできることを指す。この③は、①や②を繰り返し習熟した結果、得られた技能であるといえるだろう。

保育者を目指す学生には、専門家のような高度な技能は必要ないが、幼児が普段、歌ったり演奏したりする曲を自分の力で正確に読譜できる程度の技能の習得を期待し、指導していきたいと考えている。

2 現在の学校教育における読譜の捉え

平成17年度から本学保育学科の基礎技能・音楽を担当している。ピアノ個人レッスンでの学生の様子から読譜に関して気がついたことがある。それはピアノの初心者やピアノを苦手とする学生の多くは、新しい曲を練習する前にまず音符の下に階名を書き込み、それを見ながら弾くという方法を取っていることである。音符ではなく自分の書いたドレミを読み音にする。これを続けている限り、音符を瞬時に音として読み取る読譜の力は全く形成されない。個人的にこれまでピアノやオルガンなどのレッスンを受けたことのない学生も、小中学校の9年間を通して音楽を学んできているはずである。しかし読譜に関しては、ほとんど身につけていないというのが現状である。

全国からランダムに選んだ60校の小学校の音楽を担当している先生に行った読譜指導に関するアンケート（2000）がある。³⁾ その中で「読譜指導」は必要か必要でないか、という問いに対し、必要41.5%必要ない58.5%という結果が出ている。ゆとり教育の中で音楽は大幅に授業時間が削減された。限られたコマ数で「基礎・基本」を徹底させようという方針が打ち出されたが、それは以前のような知識や技能を基礎・基本と捉えるのではなく、まずは音楽を楽しむこと、意欲や態度を育てることが音楽活動のベースとなり、その上に知識・技能を獲得することでさらに充実したものとなっていく、このような形を基礎・基本と捉える考え方が大半となっている。しかし現実には前半の「音楽を楽しむこと」の段階で終わっている指導も多いのではないだろうか。読譜に関して、小学校ではゲームを通して遊び感覚で学ばせるなど、さまざまな工夫の実践報告もされているが、ドレミのカナふりが欠かせないのが、多くの現場の実態である。教師の間では読譜に関して、「楽譜に書き込むことができれば十分です。初見で読めなくても良いと思います」³⁾ というような意見も多い。授業の中で読譜が必要なのは、リコーダーなどの器楽指導においてである。歌唱の際は、まずCDで曲を聴かせ、いわゆる耳コピーで曲を覚える方法が多くとられているためあまり必要とされていない。これらの指導に対してここで論ずることはしない。だが個人的に楽器の演奏を習った経験のない学生たちが、簡単な読譜につまずいたり、ピアノの楽譜に階名を書き込み演奏したりする要因のひとつに、これまでに受けてきた学校教育での読譜指導があげられるであろう。

3 保育者に求められる音楽的能力

ゆとり教育の時代に育った今の学生たちが受けてきた読譜指導の実態について述べてきた。大人になってからも趣味で音楽を鑑賞したりカラオケで歌ったりする分に読譜は必要ないであろう。しかし保育者を目指す学生らにとってはそうではない。

幼児期は心と身体の発達とともにあらゆるものの根を育てる大切な時期である。それは将来ひとりの人間として自立していくための基盤となる。園生活の中で子どもたちは保育者を模倣することから学習していく。模倣を通してできるようになったことを、自発的に遊びの中に取り入れるようになる。やがてそれが他の子どもたちにも広がっていく。保育者はこのような表現の展開過程を考え、自分自身も人的環境であることを含めた音楽的環境を構成していかなければならない。子どもたちの発達段階に適した曲、その場で取り入れるにふさわしい曲を判断し選択するためには、その音楽を把握できることが前提となる。つまり楽譜から音楽を正確に読み取り判断できる力が必要となるのである。

現実には目を向けると、実際の保育現場では常に前もって練習し、準備万端で臨めるとは限らない。またその場の子どもの状態に合わせて臨機応変に演奏しなくてはならない。したがって

初見、移調奏、即興的な伴奏づけなどの能力も求められる。そしてこれらの奏法の基盤となるのが読譜なのである。

以上のことから保育者を目指す学生にはこれまでの音楽経験にかかわらず読譜力を身につけさらに高めていくことが必要だと考える。

Ⅳ 読譜に関する指導

1 短期大学入学時における読譜に関する意識調査

これまでに読譜とは何か、保育者にとっての読譜はどういった意味を持つのか述べてきた。ここで平成20年度入学の本学保育学科の学生が自分の読譜力に対してどのような意識を持っているのか、入学時に基礎技能のオリエンテーションで行ったアンケートから見ていく。（調査は本年度入学の1年生102名を対象におこない、全員から回答を得た）

このアンケートは入学までの音楽経験等を聞き、ピアノの個人レッスンを行う際の参考にするためのもので、毎年行っている。今年度は保育学科全体で読譜力育成を目標の一つに掲げた。そこで今後の指導の方針や参考にすることを考慮し、アンケートの最後に読譜の意識に関する質問を加えた。調査を行ったのは、入学時のまだ理論の授業を受けていない段階である。そのため質問では単純にト音記号、ヘ音記号それぞれの読譜について、1. よく読める 2. あまり読めない 3. 読めないに分けて回答するようにした。調査結果は、「表1」の通りである。

表1 入学時の読譜に関する意識 その1

読譜 音部記号	1. よく読める	2. あまり読めない	3. 読めない	無回答
ト音記号	53 (51.96%)	44 (43.14%)	4 (3.92%)	1
ヘ音記号	32 (31.3%)	52 (51%)	17 (17.7%)	1

※ 数字は、1学年102名中における回答数、(%)は割合を示す

次にト音記号での読譜意識に対してヘ音記号ではどうなっているのか、その関連を見ていく。「表2」は、ト音記号での1.よく読める、2.あまり読めない、3.読めない、の回答別に、ヘ音記号でどう回答したか、それぞれの人数、割合をまとめたものである。

表2 入学時の読譜に関する意識 その2

ヘ音記号 ト音記号	1. よく読める	2. あまり読めない	3. 読めない
1. よく読める 53	32 (60.37%)	20 (37.74%)	1 (1.89%)
2. あまり読めない 44	0 (0%)	32 (72.73%)	12 (27.27%)
3. 読めない 4	0 (0%)	0 (0%)	4 (100%)

※ 数は回答数、(%)はそれぞれのト音記号での回答者数における割合

毎年、ピアノ未経験者は平均して14～15名程度いるが、本年度の1学年全体102名中、ピアノ学習未経験者は18名（17.6%）であった。

未経験者における読譜意識についても、「表3」としてまとめた。

表3 ピアノ未経験者における読譜意識

読譜 音部記号	1. よく読める	2. あまり読めない	3. 読めない
ト音記号	3 （16.7%）	13 （72.2%）	2 （11.1%）
ヘ音記号	0 （0%）	9 （50%）	9 （50%）

※ 数は回答数、（%）は未経験者18名における割合

学生が、読譜という言葉に対してどの程度理解しているかについては、別問題とするが、調査結果から、学生の読譜意識に対する大まかな数値が読み取れる。ト音記号に関してはほぼ5割の学生が「よく読める」と回答しているが、ヘ音記号では約3割にとどまっている。裏を返せばト音記号では半数近く、ヘ音記号においては7割弱の学生が「あまり読めない」もしくは「読めない」と回答し、読譜に関してあまり自信を持っていないことがよくわかる。しかし回答の中には「よく読める」の「よく」の部分に線を引いて消し、「読める」に丸をつけた回答もあった。「あまり読めない」と答えた学生の中にも、ある程度読めるがよくは読めないと考える学生が選択している可能性も考えられる。

ト音記号の読譜が「よく読める」の回答者、「あまり読めない」の回答者、ともにヘ音記号になると、その読譜力は同じ若しくは下がると意識していることがわかった。

ピアノ学習未経験者を見ていくと、ト音記号に関しては18名中3名の学生が「よく読める」と答えている。そして約7割の学生は「あまり読めない」と答えている。ヘ音記号においても「あまり読めない」と半数の学生が回答した。「あまり読めない」ということは、見方を変えれば自信はないが「少しは読める」ということであろう。これらはこれまでの学校教育における学習経験がわずかでも読譜に対する意識へとつながっていることが汲み取れる。このような読譜に対する意識の芽を伸ばし、成長させていくことが必要なのではないだろうか。ピアノなどの楽器経験者の読譜力や、意識が高いのは、当然であると考えられるが、未経験者であっても、今後の指導によって意識が変化する可能性を秘めていると捉えることもできるであろう。

なおこのアンケートでは、ただ単にト音記号、ヘ音記号が単純に読めるかどうかだけを問うている。その方法が初見でのものか、時間をかけてゆっくりと音を数えながら読むことも含めるのか、特別限定をしていない。学生の意識と、実際に読譜ができるかどうかをテストをして比較したものでもない。従って学生が主観的に自分の読譜力を判断したものにすぎない。しかし、入学時の学生における読譜意識の大まかな数値として捉えることで、今後の指導による変化を探る一つの拠り所としたい。

2 基礎技能・読譜に関する指導内容

読譜には、楽譜を読むことができる、楽譜を読み取り歌ったり演奏したりできる、楽譜を見てそこから音楽をイメージすることができる、という3つの段階があることを先に述べた。入学時に行った意識調査から、本学平成20年度入学の学生のうち、高音部記号に関しては約半数、低音部記号に関しては、7割弱が読めないもしくはあまり読めないという結果がでたことにも触れた。今年度、私が担当しているピアノ個人レッスンのオリエンテーション時に、ピアノ初心者学生の一人が、突然泣き出ししてしまうという場面があった。最初、理由が分からず「どうしたの?」と尋ねると、「自分はほとんど楽譜を読むことができない。これからレッスンについていけるかどうか不安でたまらなくなり泣いてしまった」とのことだった。ここでは大学生になって、他のクラスメートの前で自分の感情をコントロールすることがうまく出来ずにいる、という心の問題はさて置き、私たち指導者は、このような学生が音楽に対して臆することなく前向きに取り組み、基礎を身につけられるような環境を提供し、導いていかねばならない。そこで今回、単純に楽譜を読むという読譜の入口の段階でつまづいている学生に対し、授業内で行った指導・取り組みを中心に述べていく。

平成17年度に本学保育学科が開設されてからこれまで、読譜力の弱いいわゆる楽譜を読むことができない学生に対し各担当教員（基礎技能・音楽ピアノ個人レッスン担当8名）はレッスンの中でそれぞれ独自の個別指導を行ってきた。

近年、保育士・幼稚園教諭、採用試験に初見視奏・視唱を課す園が増加している。けれども課題の多くは園で日常幼児が歌っている「こどものうた」が取り上げられるため、学生にとって全く知らないというものではない。しかし当日、曲を指定され演奏することは、その場で本来の実力、つまり実践力を問われるものとなる。今後もこの課題傾向は続くであろう。

これらの現状を踏まえ平成20年度、本学では学科全体で読譜力育成を目標のひとつとし、取り組むことにした。学生には、年度初めのオリエンテーションにおいて上述の傾向を説明した。

読譜は授業時間の中だけで身につくものではない。繰り返し譜面を読む反復練習を通して、自然に身についていくものである。その性質を考慮し基礎技能の理論や個人レッスンの中で、どのように学べばよいのかその方法を提示し、各自の努力を促すことにした。またこれまで教員の間で、楽譜があまり読めない学生が、階名の書き込みをすることに対し、好ましいものではないというある程度の共通認識があった。なぜならこれは、音符を読まずに、書かれたドレミを読みながら演奏するパターンを繰り返すことになり、この状態が続けば、読譜力育成に蓋をしてしまうからである。そこで学生には、できるだけ書かない→同じ音は書かない→覚えてきたら消すといった具合に段階を経て、音符を読むことができるように導いてきた。今年度は、学科全体で、階名の書き込みをしても良いのは学生が授業に慣れる5月一杯までとし、それ以降は書かないというきまりに統一した。

今回、共通の取り組みとして音符カードによる学習方法を導入した。これは自宅での個人ピアノレッスン時に使用している、という教員からの提案があり全体で試みることになった。音符カードには一枚に一音ずつ表に音名、裏に五線でその音が記されている。カードをフラッシュして次々と瞬時に読むことで読譜力つけるものである。また学生の必要に応じて五線ボード（商品名カラーノート・いろおんぶ磁石板）も使用した。こちらは大譜表が印刷された下敷き版のマグネット式ボードに小さな磁石玉がセットされたものである。磁石が置かれた位置の音を読むことと、反対に指定された音を磁石で置いて表す練習もできる。これらの教材は学生

に貸し出しも行い利用できるようにした。

ピアノ個人レッスンにおいては指導者から見て読譜に苦勞している学生、訓練が必要であると判断した学生に対して上記の取り組みを行っている。そこで全体に学習方法を周知させることも考え、クラス授業の理論、音部記号や音名を学習する第2回、第3回の授業の際にフラッシュカードを採り上げた。集団での授業のため、一人の学生に何枚ものカードを答えさせるのではなく、列ごとに一人一枚ずつテンポよく順に答えていく方法をとった。学生の反応は大半の学生が高音部記号をさほど問題なく即答することができた。それに対し低音部記号になると緊張した顔を見せる学生もちらほらあり、指で数えながら答えを考える姿も見られた。そして改めて音符カードの学習方法と希望者は貸し出し可能であることを伝えた。

その他にピアノ個人レッスンにおいて各教員が個々の学生に応じた読譜指導も試みている。具体的にはオリジナルの課題を作り五線内の音符を即読させる、簡単なソルフェージュ課題を歌わせる、課題曲のバイエルを進む際、初見で旋律や伴奏を歌う、などがあげられた。また音の高低の判別よりもリズムにつまずいている学生が多く見られたため、リズムに動物の鳴き声などを当てはめ、リズム打ちをする指導をしたという報告もあった。

V アンケート調査

前項の「読譜に関する調査」の結果を基に、読譜の初歩段階でつまずきのある学生に対して基礎技能・音楽Ⅰの中で学習の仕方を提示し、各自の努力を促した。その学習過程における第6回の授業と、前期の授業最終日に学生へのアンケート調査を行った。指導を受ける中での読譜の意識と取り組みの成果を、アンケートの結果から考察する。

調査目的

今回の調査目的は次の3点である。

1. 平成20年度入学保育学科学生の読譜（初見）に関する意識を把握する
2. 読譜の初歩段階においてつまずきのある学生へ行った指導の効果をみる
3. 調査の結果を今後の読譜指導、後期「基礎技能（音楽2）」の指導内容に役立てる

調査対象、方法、時期

平成20年度1年生 102名 全員

質問紙法アンケートをそれぞれ基礎技能（音楽1）の授業時間内に行った。

第1回 平成20年6月3日、第2回 平成20年7月29日

調査結果

第1回アンケートと調査結果

表4 第1回読譜に関するアンケートと結果

読譜に関するアンケート	
Ⅰ 楽譜は初見で読めますか	
① ト音記号	1. すらすら読める (27, 26.4%) 2. だいたい読める (57, 55.9%) 3. あまり読めない (14, 13.7%) 4. 読めない (4, 3.9%)
② ヘ音記号	1. すらすら読める (10, 9.8%) 2. だいたい読める (39, 38.2%) 3. あまり読めない (41, 40.2%) 4. 読めない (12, 11.8%)
Ⅱ ①②の質問で3.、4.と答えた方、読めるようになるための努力はしていますか	
	1. やっている (33, 61.1%) 2. 特別していない (21, 38.9%)

Ⅲ 読めるようになるためにどのような取り組みをしていますか	
1. 意識して楽譜をよく見る(読む)	(25、75.8%)
2. 音符カードを使って読む	(5、15.2%)
3. その他()	(5、15.2%)
※2.3 複数回答者 2名	
Ⅳ Ⅲを回答した方、その取り組みはどのくらいのペースで進めていますか	
1. 毎日	(1、3.0%)
2. 週3～4日	(14、42.4%)
3. 週1～2日	(18、54.5%)

() 内の数字は回答数と%を示す

第2回アンケートと調査結果

表5 第2回読譜に関するアンケートと結果

読譜に関するアンケート	
Ⅰ 楽譜は初見で読めますか	
五線内の音に関して	
①ト音記号	1. すらすら読める (50、49.5%) 2. だいたい読める (44、43.6%) 3. あまり読めない (6、5.9%) 4. 読めない (1、1.0%)
②ヘ音記号	1. すらすら読める (20、20%) 2. だいたい読める (53、53%) 3. あまり読めない (26、26%) 4. 読めない (1、1%)
五線外の音に関して	
③ト音記号	1. すらすら読める (15、15%) 2. だいたい読める (56、56%) 3. あまり読めない (27、27%) 4. 読めない (2、2%)
④ヘ音記号	1. すらすら読める (5、5%) 2. だいたい読める (42、42%) 3. あまり読めない (44、44%) 4. 読めない (8、8%)
無回答 1名	
Ⅱ ①②③④の質問で3.4.と答えた方、読めるようになるための努力はしていますか	
1. やっている (28、50.9%) 2. 特別していない (27、49.1%)	
Ⅲ 読めるようになるためにどのような取り組みをしていますか	
1. 意識して楽譜をよく見る(読む)	(20、64.5%)
2. 音符カードを使って読む	(7、22.6%)
3. 五線ボードを使って読む	(2、6.5%)
4. その他()	(2、6.5%)
Ⅳ Ⅲを回答した方、その取り組みはどのくらいのペースで進めていますか	
1. 毎日	(2、7.1%)
2. 週3～4日	(6、21.4%)
3. 週1～2日	(18、64.3%)
不定期の回答者	(2、7.1%)
Ⅴ Ⅲで答えた取り組みは前回のアンケートで答えた取り組みと同じものですか	
1. はい	(17、60.7%)
2. いいえ	(11、39.3%)
Ⅵ Ⅴで1. はいと答えた方、取り組みを始めてから効果はありましたか	
1. 効果があった	(4、23.5%)
2. ややあった	(11、64.7%)
3. 変わらない	(2、11.8%)

() 内の数字は回答数と%を示す

第1回目のアンケートは、6月第1週に行った。今年度、階名の書き込みをしてもよいのは、5月いっぱいまでというきまりを作ったこと、また読譜に問題を抱えた学生には各教員の指導が浸透し始める時期ということを考慮しこの日を選んだ。入学時の意識調査に比べ今回は読譜だけの意識を詳しく把握するため、さらに明確な回答を得られるような質問内容とした。具体的にはまずⅠの質問において、読譜について「初見で」と読む方法を限定した。また選択肢については、1.すらすら読める、2.だいたい読める、3.あまり読めない、4.読めない、の

4段階とした。

第2回のアンケートでは初見での読譜に関して、音域を五線内と五線外にわけて回答させた。一般的に、五線内の後に五線外の読譜が可能になる。五線内が読めるようになったからといってそれでよしではなく、加線を使った音域も読めるようにさせたい。2回目のアンケートの時点でまだ五線内に留まっているのかどうか、また五線外に進んだ学生はどのような進み方をしているのか、この質問が進度や成果を見る目安になると考えたからである。また前期終了段階でこれまでの取り組みの効果を問う項目を設けた。

考察

第1回のアンケート結果から、Ⅰ.初見での読譜に関して高音部記号で82.3%、低音部記号で48%の学生が「すらすら読める」または「だいたい読める」と答えている。これは入学時に行った事前アンケートの「よく読める」51.96%（高音部記号）、31.3%（低音部記号）に比べるとかなり上昇している。入学時には楽譜を読むということに対し、漠然としたイメージで答えていたものと思われる。しかし今回は音楽理論を学び、ピアノ課題に取り組み、更には授業の中で聞いた採用試験の傾向や保育現場での必要性を実感していることが回答に表れたのではなかろうか。

更に第2回のアンケートでは、Ⅰ.五線内の音に関して、高音部記号で93.1%、低音部記号で73%の学生が「すらすら読める」または「だいたい読める」と答えている。これだけの短期間にプラス意識が高まったのは指導内容が肯定的に受け入れられ、学生が自主的に取り組んだ結果と言えるであろう。

第2回における五線外の音に関して、高音部記号で93.1%、低音部記号で73%の学生が「すらすら読める」または「だいたい読める」と答えた。この結果は第1回目の五線内の結果に近似している。この音域に関しても各自の読譜に対する意識が持続していれば時間をかけ取り組みを反復することで、同じような結果が期待できるであろう。

「あまり読めない」、「読めない」、と答えた学生に関して読めるようになるための努力について質問した。第1回でⅡ.「やっている」61.1%、「やっていない」38.9%、第2回では「やっている」50.9%、「やっていない」49.1%という結果がでた。読譜をあまり得意としない学生たちも様子を見てみると、ピアノの課題をこなそうと懸命に努力している。しかし課題のノルマを終えなければならないプレッシャーからか、読譜よりもとにかく音を覚えて弾きこなすことにウエイトが置かれているようだ。教員からは読譜に関して「最初は五線に音符を書き即読させる取り組みもした。意識の高い学生は自主的に家でも取り組んでいるが、意識の低い学生は、なかなか進まない。後半になると課題が終わらないためとても読譜指導にまで時間を取れなかった」という報告もあった。Ⅱ.の読めるようになるための努力をしている割合が第1回に比べ第2回に下がった要因は以上のような結果と考えられる。限られた時間の中でどのように指導していけばよいのか、今後検討したい。

Ⅲ.の読めるようになるための取組みに関して、意識して楽譜をよく見る、が第1回75.8%第2回64.5%と大半を占めている。課題をこなす上でも、一番身近に行うことができ実践されていることが明らかになった。一方、今回初めて導入紹介した音符カードを、第1回5名（15.2%）第2回7名（22.6%）の学生が、五線ボードについては2名（6.5%）の学生が使用していると回答した。その他の回答には、・楽譜にドレミを書かない・同じ音にはドレミをふらない・自分でノートに問題を作りドレミを書いている・知らない曲の楽譜を見ながらピアノ

の鍵盤に触るなどが挙げられた。ドレミを書かないという回答は、書き込んだ階名に頼らず読譜をすることを、学生は、一つのハードルとして捉えていることがわかる。また自分でノートに問題を作り行っているのは、レッスンの中で受けた指導を自分でもやってみようという意欲の表れである。そして最後の楽譜で読み取った音符をピアノの鍵盤で触る行為は、視覚を通して判断したものを、身体の動きつまり正確な鍵盤をタッチすることで確認しているのである。音が読めることがすぐ弾けることにはつながらない。彼女の行っているような行為を繰り返しながら、自分の力で楽器を弾くことができるようになっていくのである。音符が読めるけれど弾けないという学生も頻繁に見られる。この例を何らかの助言として活用したい。

第2回のアンケートでは、読めるようになるための取組みに対し、効果があったかどうか質問した。Ⅵ.では、「効果があった」23.25%、「ややあった」64.7%、計87.95%の学生が肯定的に捉えている。その中で今回導入した音符カードを使用した学生7名中、「効果がややあった」6名、未記入1名、五線ボードを使用した2名中、「効果があった」1名、未記入1名、という結果がでた。以上の結果から、今回行った読譜指導における試みは、継続して音符カードのトレーニングを行うことにより、音符を即読できるようになるという効果が明らかになった。読譜に苦手意識を持ち、カードを使用していない学生においても、取り組み次第で一定の効果が期待できるのではないだろうか。

Ⅵ まとめ

保育者として身につけておきたい音楽的な技能、その中でも基盤となる読譜について、今年度(2008年)初めて学生に意識調査を行った。これまでのピアノ初心者やピアノを苦手とする学生らが、度々楽譜に階名をふっている様子から予想していた通り、楽譜を初見で即読するというのに、多くの学生が苦手意識を持っていることがわかった。こういった意識は、今後の音楽学習を進めていく上で、意欲を持てないなどマイナスの要因となることが懸念される。

そこで、今年度新しく導入し試みた音符カードを用いた学習方法は、第1回、第2回アンケートの結果から、地道な取り組みを続ける学生にとっては、ある程度効果があったと言える。しかし今回行った音符カードの取り組みは、単に五線に記された一つの音を、瞬時に読むというだけのものである。今回は読譜の入り口の段階として、まず楽譜に階名の書き込みをしないという所からスタートした。そして基本中の基本である、一つの音を即読できるようにするための取り組みを行ってきた。今後は、実際の音楽の中で生かすことのできる実践力の養成をしていかねばならない。音楽において必要とされる読譜力は、何の音なのか判別することだけではない。実際の音の高さをイメージして、実際に歌ったり演奏したりできる力、一つの音だけではなく複数の音のつながりやリズム、拍子感をつかむことのできる力、音符を音楽として認知できる力、そして楽譜から読み取った音を、鍵盤に結び付け楽器を通して演奏する技術や、表現できる技能である。これらを育成していくことが今後の目標である。そこで読譜の継続的な指導として、まず音程感やリズム感を培うような取り組みを盛り込んでいきたいと考えている。具体的にはさまざまな音程の2音が書かれた「音程カード」や5音程度でできた「メロディーカード」を歌ったり弾いたりする、簡単なリズムパターンを記した「リズムカード」をリズム打ちする、などのヴァリエーションを検討している。そしてそれらを複合させた総合的な読譜訓練も必要である。このような段階を追った訓練は、音楽への理解を深めながら読譜の力を高めることに役立つものと考えられる。いずれにしても読譜力を育成するための取り組みが、保育現場の音楽に即したものとして行われることが望ましい。

また保育現場での実践に応用できる読譜力の育成法として、日常保育現場で歌われている「こどものうた」を初見視唱・初見視奏の課題として活用することも有効であろう。後期「基礎技能（音楽2）」でも上記のような指導を取り入れ「基礎技能（音楽1）」に引き続き読譜力の育成を目標の一つとしていくことにする。

要約

平成20年度入学の保育学科1年生全員を対象に、読譜に対する意識調査のアンケートを「基礎技能・音楽1」の授業内に行った。オリエンテーション時には読譜に関して、高音部記号で約5割、低音部記号で約7割の学生が「読めない」もしくは「あまり読めない」と回答した。それを受け今年度、保育学科全体で読譜力育成を目標に掲げた。学科での共通指導として初歩的な読譜力に欠ける、いわゆる楽譜が読めない学生に対し音符カードの学習法を提示し各自の努力を促した。学習過程での読譜に関する意識と授業終了時における取組みの成果を、学生へのアンケート調査を通して考察した結果、五線内の高音部譜表で9割、低音部譜表で7割の学生が「すらすら読める」または「だいたい読める」と回答しプラス意識が大幅に上昇した。今回行った読譜指導における試みは、カードを用いたトレーニングの継続により、音符の判別能力の育成に有効であることが明らかとなった。

引用文献

- 1) 丸山太郎著「音楽的読譜能力形成に向けた読譜指導法について（試論）」『東京学芸大学紀要』第5部門第46集、1994、p.36
- 2) 相原末治著「楽譜は音楽の文字」『子どもと一緒に学ぶやさしい楽譜の読み方』音楽之友社、1987、pp.33
- 3) 真篠将編「読譜指導は必要!？」『教育音楽・中学、高校版7』音楽之友社、2000、pp.51-53
- 4) 真篠将編「読譜にも段階がある」『教育音楽・小学版1』音楽之友社、2002、pp.50-51

参考文献

- 池川礼子著「読譜に抵抗なく楽しくピアノを弾くための即読法のすすめ」『ムジカノーヴァ』351号、vol.31-5、2000、pp.30-38
- 呉曉著『ピアノの上達はソルフェージュから』音楽之友社、1991.
- 小池美知子、上村聖子、木村真由美「保育者養成における鍵盤楽器指導に関する研究（3）－読譜力育成のための指導について－」『今治明德短期大学研究紀要』第29集、2005、pp.27-39
- 菊池質子著「読譜を考える」『誤解されているソルフェージュ』、カワイ出版、2005、pp.52-58
- 三森桂子著「保育者に求められる音楽的資質について」『日本保育学会大会研究論文集』No.54、2001、pp.638-639
- 村田千尋著「楽譜をめぐって」『音楽の思考術－より深く音楽を知るための実践的技法－』音楽之友社、2000、pp.11-13